



10月



「就学前の非認知能力レンズで『いいとこ』みつけ!!」 後編

岡山県教育委員会主催で実施した「令和四年度 就学前の非認知能力育成支援講座」のうち、事前研修として配信された動画の要旨を三回に分けてお届けします。講師は、岡山大学准教授の中山芳一（なかやま・よしかず）先生です。

中編に引き続き、実践編として、非認知能力レンズを持つために大切な、三つの「大人の関わりポイント」を紹介していきます。

・一、「非認知能力レンズ」を持つて、プロセスから「いいとこ(価値)」を見つける。

①できている「と」目を向ける

②ポジティブな見方に変えてみる

・二、子どもの気持ちや想いを聞いてみる

・三、意識つけのために伝える。

後編では、一の②から後の部分を説明します。

●②ポジティブ(肯定的な見方)に変えてみる

ポジティブの反対はネガティブ(否定的)ですね。つまり物事にはプラスとマイナス両方の面があるということです。ここで「リ

フレーミング」という言葉を紹介します。

フレーム(枠組)を見ていると、嫌なことがばかり見えてしまうことがあります。それを、「リ」は「RE」、ひっくり返すと、嫌なことがいいことに見える場合があるんです。

これをリフレーミングと呼びます。

これができる、大人の側にゆとりが生まれます。今までは「気になることがいっぱい注意ばかり」と感じていた子どもに對して「いや、これはうちの子の長所、強みだ」と捉えられるようになり、それが心のゆとりを生み出すことになるんです。

では、具体的な例を挙げてみましょう。

・例一。買い物で子どもに「お菓子を一つ買ってあげる」と言つと、なかなか選べずに悩んで、優柔不断な子だ、と感じる場合。これはネガティブな見方ですね。ですが、「もつと早く決めてよ」とならずに、「この

子、いろんなものに良さを感じることができるとだな」と捉える。「あれもこれもいいな」と感じる人が多いのを、ネガティブだと「優柔不断」になりますが、ポジティブに見方を変えて「いろんなものの良さに気づくことができる子なんだな」と捉えてもらえたらと思います。

・例二。授業参観に行くと、グループワークでおちゃらけたことを言つてふざけていた場合。性格的にお調子者の子などは、こういうこともありますよね。でも、これも、おちゃらけることで、雰囲気明るくできるし、陽気でノリがいい、ムードメーカーとして雰囲気をよくしてくれる場合もあるわけです。やりすぎると独りよがりになってしまふかもしれませんが、良い加減だと、周囲の子どもたちにとって、助かることもあるわけですね。

・例三。習い事で新しいことにチャレンジするとき、なかなか一歩が出ずにコーチを困らせていた場合。これも、「自信がないな」とか、「もつと挑戦すればいいのにな」と思うのではなく、物事に慎重であり、この先のリスクを見通すことができる、と捉えてもらえたらと思います。

そのほかにも、リフレーミング事例としてこんなものがあります。

・飽きっぽい→好奇心が旺盛

・ずるがしこい→知性がある、賢い、先が見通せる

・気分屋、物事にこだわらない

・うそつき→相手の気持ちを想像できる

・計画性がない→行動力がある

・けんかっばい→情熱的

・マイペース→自分の世界を持っている

・だらしない→おおらか

・周りが見えない→一つのこと集中できる

こうやって、同じ行動をポジティブに捉え直すことができればいいですね。この事例を参考に、お子さんのことも捉え直してみてください。自分と向き合う力も自分を高める力も他者につながる力も網羅されていますので。

ここで、ワーク2をやってみましょう。

・お子さんの「困ったな」「大丈夫かな」と思うことを挙げて、ポジティブに捉え直すようなになるか、考えてみましょう。

・困ったな、大丈夫かなと思つこと

・ポジティブに捉えること



倉敷市立川辺小学校 2年 塩見樺乃子

(令和4年度)

「うさぎとちょうのパーティ」

(押し葉を使ったクレヨン画)

もみじやいちちょうの葉っぱを使って、ちょうちゅうやうさぎをつくりました。とってもかわいくできて、気に入っています。

いるのか、理由を是非聞いてほしいと思います。子どもが何かやっているときに、次の点を聞いてください。

・何をやってるの？―状態
・なんでやってるの？

―きっかけ、動機、理由

・どうだった？

―気持ち、考え

「こういうコミュニケーションは、子どもにとっても、「関心を持ってもらえている」という安心感につながります。」「自分とちゃんと見てもらえている」「受け入れてもらえている」という安心感が他者とつながる力となり、コミュニケーションにつながっていくのです。

●三、意識づけのために伝える

リフレッシングについての有名な話で、半分の水が入ったコップの話があります。コップに半分の水があるという事実に対して、ネガティブに「半分しか入ってない」と捉えるのか、ポジティブに「半分も水がある」と捉えるのか、これが捉え方です。悲観的に捉えてしまっていたらポジティブに捉え直し、自分のフレーム次第なんだと考えられるようになると良いと思います。

●二、「非認知能力レンズ」を持って聞いてみる

お子さんの気持ちや想いを是非聞いてみてあげてください。非認知能力レンズやリフレッシングを使って、お子さんの姿、行動、言動を観察し、子どもがどんな思いで

子どもに良いことだと伝え、子どもと共有する段階です。「非認知能力を意識づけるために価値を伝えよう」ということですが、子ども自身が「それをしていきたいなあ」と思うためには、大人から何回か伝えてフィードバックし、「そうなんだ、これって良いことなんだ！じゃあもっと伸ばしていいこう！」という意識づけができることが必要です。

このように、伝えて価値を共有し、意識

づける場合、重要な点があります。それは、大人側は価値を強要できないということです。教えることもできません。「これはいいいこと(価値あること)だから、これからもしない」と、強要したり押し付けたりできないんです。

では、共有とは何かというと、必ず子ども側に最後をゆだねるものなんです。子どもが「そう言ってくれるんだったら、私もっとこうしていきたい」と思えるような信頼関係が、子どもと大人(親)の間にあることが必要です。言い方を変えれば、大人側が、子どもにとって、価値を共有したい、信頼できる相手であるかどうかということなんです。そこで、「価値を共有したい大人」と思ってもらえるために必要なことを三つ紹介します。

・一、結果(できたかできなかったか)だけでなく、そこに取り組んでいる子どものプロセスを重視していくこと。

・二、言うことに一貫性があること。例えば、ある日は「友達を大切に」と言ったのに、別の日には「困った人は放っておいて先に行こう」というように、一人の大人が全く違う価値で子どもと接してしまうと、子どもは「どっちなの？」と混乱してしまいます。ぶれないこと、一貫性が非常に大

事です。

・三、子どもに共感すること。子どもの言うことを否定せず、「そういうことを考えていたんだね」と受け入れてあげる大人でいてください。そうすれば、子どもは安心感や信頼感を持ち、「この人と価値を共有したいな」と思ってくれると思います。

この関係性は、価値を共有する上で非常に重要なので、是非意識してほしいと思います。

これで実践編も終了しました。我々は、子どもの非認知能力を伸ばすために、何かを教え込んだり押し付けたりできません。アメリカの教育ジャーナリストの有名な言葉で、「非認知能力は教える身につけさせるものではなく、環境産物だ」という言葉があります。子どもたちは、環境の中で様々な体験、経験をし、学んでいって非認知能力を自ら伸ばそうとしていきます。そして、我々大人は、子どもたちにとってまさに環境です。ですから、我々大人が、子どもたちにとってより良い環境をつくっていく、それが、子どもの非認知能力を伸ばすことにつながっていくのです。

(終わり)